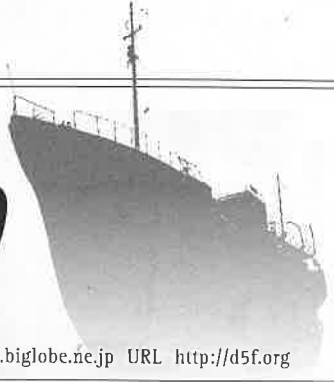


福竜丸だより

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



沈めてよいか第五福竜丸

福竜丸は、日本船が初めてアメリカの漁船と衝突し、放射能汚染物質をばらまいたことから、世に知られることになった。船は沈没し、船体は漂流し、その後、夢の島に沈められた。その沈没の経緯や、沈没後の船体の状況、そして沈没した船体周辺の環境汚染について、写真や図説を交えて紹介する。

展示館の入り口付近に展示されている夢の島に放置され傾く「はやぶさ丸」(第五福竜丸)のパネル。写真・森下一徹(一九六八年一月撮影)。「沈めてよいか第五福竜丸」の投書全文のパネル。

沈めてよいか第五福竜丸

— 船の保存がよびかけられて40年 —

一九六八年三月一日の3・1ビキニデー全国集会で東京の代表から、第五福竜丸が東京・江東区夢の島のゴミの海面に放置されていることが報告され、三月一日には朝日新聞「声欄」に投書「沈めてよいか第五福竜丸」(武藤宏一さん、会社員、当時二六歳)が掲載されました。それから四〇年、第五福竜丸平和協会では、△保存のよ

びかけ四〇年〇のメモリアルイヤールの記念事業として、「市民の平和の願いが守った第五福竜丸」の特別展を秋に開催します。この展覧会は、同じく全国的な市民の募金により保存が実現した広島原発原子爆下ームについてもとりあげ、原水爆の惨禍を後世に伝えた市民の願いを想う企画とします。

3・1ビキニ事件記念のつどい開かれる

協会主催の今年のつどいは、二月二十四日午後、夢の島公園内の東京スポーツ文化館にて開催されました。

学教授、協会評議員)がコーディネーターをつとめました。

この日のテーマは「いま死の灰を考える」と題し、講師は森一久さん(科学ジャーナリスト)、元日本原子力産業会議副会長、協会評議員)と青山道夫さん(気象庁気象研究所地球化学部主任研究官)の二人、奥山修平さん(中央大

つどいは、主催者を代表し川崎昭一郎会長が「3・1ビキニ事件の意味をさまざま角度から考えたい。きょうも被災当時の科学者のことや放射能雨ことなど質疑もふくめて深めていただきたい」と挨拶しました。講演内容は二面〇七面に掲載します。

ビキニ事件と当時の科学者

—湯川・三宅・田島・檜山・
猿橋ら先達の信念を偲ぶ—
森 一久



講演する森さん

私は、広島で爆心から一キロで被爆し父母はじめ家族五人を亡くしました。何とか助かり、戦後、京都大学の湯川秀樹先生のもとに戻りました。

湯川さんは、科学者の社会

的責任について常づね述べられていました。私の大学卒業後の進路についても、これからは物理学の問題と社会とのかかわりがとても大切だ、科学に詳しいジャーナリストが求められているとの助言をくださり、科学雑誌「自然」（中央公論社）の記者になりました。

湯川さんの「中間子論」というのは、原子核の中心の部分が、当時は中性子と陽子がくつついてできているといわれており、なぜ一つにまとまっているかを中間子の存在として予言し、一九三四年に発表しました。実験で実証されるのはのちのこと、十数年を経てノーベル賞を授与されました。

核爆弾は、原子核の持つエネルギーを悪用したものです。自分が予言して発見した中間子が、これは寿命一億分の一秒という幻の粒子で、原子核の分裂が瞬間におこると中間子が余り、それが崩壊しエネルギーが強大な核爆発となるともいえる。自分の発見したものが核爆弾のエネルギーになったと観じたのでし

ようか。

福竜丸事件を契機に核軍拡はすすみ、人類を奈落の底へ落とし込むような状況を生み出したわけです。そのことへの責任感をことのほか持つておられたと思います。

後になって、中間子を加速器で作るガン治療に役立てる研究を大変熱心に応援していたのも、少しでも平和のために貢献したいとの思いではなかったのでしょうか。

日本の科学者の活躍

日本の科学者は事件に大きく関与し、重要な結果を残しました。地球環境が核実験の影響でどうなるのか、地球規模で検討することにもなりました。

湯川さんは、ビキニ事件の判明した三月末には論文で、「人類は自ら制御できないようなものを作ってしまった。これをなくさないと人類は原子力と共に滅亡してしまう」と発表、生涯、核兵器禁止の行動をなされました。

三宅泰雄先生は、放射能雨の観測や環境中の放射能汚染問題の先鞭をつけられました。申し上げるまでもなく第

五福竜丸の保存運動の中心となりました。

三宅さんは、大変広い視野を持った方で、構想力もすぐれ学際的な研究や取り組みを主張されていました。それというのも放射能問題は、さまざまな分野が共同しなければ、というお考えからでした。

猿橋勝子先生は、当時、「死の灰」の成分を解析したわけですが、大変優れた化学者でしたから、まさに実力で三宅先生の研究を補佐しました。のちに女性科学者の会を作り、その中から女性最初の物理学会会長が出ています。

檜山義夫さんは、東大の水産で放射能マグロの問題を手掛けられました。豪快な方でお酒もよくして、当てもマグロを最初に食べて大丈夫だと言っておられました。

田島英三さんは、理研から戦後早くに自力でアメリカに留学し、ビキニ事件で国連がつくった世界の放射能問題を検討する「委員会」の事務局となりました。国連未加入だった日本からの職員の第一号です。彼の自伝には、ビキニ事件に出会ったことが人生の

方向を決定づけた…と書かれています。

原子力委員会のこと

田島さんは帰国後、原子力委員会の委員になり、原子力平和利用が筋がとおるよう力を尽くされました。委員のときに「安全を重視しなくてよい」という大臣の姿勢に怒って辞表をたたきつけて辞めてしまいました。

湯川さんも後に原子力委員を辞退するわけですが、実は私は湯川さんに原子力委員に物理の専門家として入るよう強く勧めたのです。ところが、初日の委員会で正力松太郎委員長が、「研究などしなくても輸入すればよい。テレビと同じだ」と言ったので湯川さんも辞めると言い出した。私は「こんなことだから」監視してもらわなければ困ると慰留しました。

湯川さんもしばらくは我慢しておられましたが、本当に心労で胃潰瘍になられてお辞めになりました。

ラッセル・アインシュタイン宣言について

宣言には湯川さんはすぐに

(3めんど下につづく)

いま「死の灰」を考える

青山道夫

死の灰を測る

最初に死の灰とはなにか、言葉の定義をしておきたいと思えます。最近ではよく引用されるウィキペディア（インターネット上の百科事典）で「死の灰」を検索すると次のように出てきます。

「放射性降下物」核兵器や原子力事故で生じた爆発で生じた放射性の塵のこと。（略）『死の灰』として知られる。」と書いてあり、「日本では第五福竜丸の原水爆実験が有名である」とあります。実はこ

れは正確ではありません。

広辞苑によれば、「死の灰」というのは「五四年、第五福竜丸事件の際、日本の新聞が造った語」とあり、学術用語ではありません。正確にいえば「核分裂の生成物」というべきですし、「人工のものである」ことをきちんといわなくてはなりません。また核分裂によってでき、大気の上層に上がった後、地球表面に落ちてくるものを「人工放射性降下物」といいます。

その人工放射性降下物のひとつセシウム137に特化して話します。セシウム137はどこからきて、どこへいき、どうなるか。

天然に存在しているウラン238、235や原子炉内で作られたプルトニウムに中性子をぶつけると、核分裂した直後にはヨウ素137ができ、二〜三分後にはセシウム137になります。このセシウム137は半減期が三〇年と長く、大気中に放出

されたものは地表か海面に降下します。

地球上の三分の二は海です。から海に落ちたものの方が地表に落ちたものより多く、海に落ちたものは海の水と一緒に動きます。地表に落ちたセシウム137などは土とくっつき易いのでその場所にずっとあってほとんど動いていません。表面から数十センチの深さまでのところにとどまります。海面に落ちたものは海水の動きとともに動きます。この海中でどう動いているかというのが現在の私の研究テーマです。いまだどこにあるのかは、実際に海に行つて水を探つてきて測ります。が、海水の採取は大変な作業で、海洋全部の海水を細かく計測するわけにはいきませんので、「海洋大循環モデル」というものも使います。

大気中に放出されたセシウム137は三〇日から数年くらいのスケールで落ちてきますので、長期間測り続けるとどこにどれくらい存在している、その量がどのように変わっていくかが分かるわけです。セシウム137は最後には、ど

こに存在しようかと、みずから放射線を出して崩壊し、安定体のバリウムになります。半分になるのに三〇年かかり、三〇〇年で約一〇〇分の一。最後の一個が壊変するのは相当先ですね。これくらいの時間が必要なのです。

半減期というのは放射性のものが「崩壊」によってその量が半分になるまでの時間で、それぞれ固有のもので、この長さはいまのところ誰も変えることはできません。

死の灰のシグナル

初期の事例を見てみます。最初に地球上にセシウム137を放出したのは、四五年七月一六日にニューメキシコでアメリカが行なった最初の原爆実験でした。その後が八月六日の広島と九日の長崎での原爆投下です。北極の水には、放射性降下物の積もったものが地層のようになっており、四五年原爆のシグナルもあります。それ以前には地球上に存在しなかったということでもあります。

五四年の一連の水爆実験で日本に届いた物理的あるいは

(2めんよりつづく)

名前を連ねたわけですが、当時の話では、必ずしも世界の著名な科学者が皆、賛成をしたわけではないんです。ラッセルが依頼をした科学者は二〇名でしたが、署名したのは八人です。九人は拒否したわけです。ジュリオ・キュリは遅れて同意しました。

当時は湯川さんのように第五福竜丸の被災と核兵器による人類滅亡を捉えて行動する方ばかりではなかったといえるでしょう。今はどうでしょうか。(科学ジャーナリスト、元日本原子力産業会議副会長、協会評議員)

化学的なシグナルについて紹介します。水爆実験が行われたのは日本時間で三月一日午前四時頃でした。その約三時間後の一日朝七時ごろに日本国内で気圧変動が記録されています。

このあと核実験のたびに同じような気圧変動現象が起こっている。ですからアメリカが核実験の回数を公表しなくても、何回実験したかがわか

(4めんにつづく)

講演する青山さん



かると、当時の気象研の研究
者が発行した冊子「原水爆実
験と気象」に記述されていま
す。これは物理的なシグナル
その一です。

大気上層を経由してやって
きた最初の放射能は計算上
では三月五日〜六日くらいに
は日本に届いている。ただし
放射能としての記録は残って
いません。さらに下層の高度
三〇〇〇メートルくらいをや
つてきたものは、一週間から
一〇日後くらいに辿り着きま
す。日本で雨の中に放射能が
強く検出されたのは気象研が
観測を始めた四月です。この
後も一連のビキニでの核実験
の放射能は四月から夏にかけ
て日本の雨の中に検出されま
した。

海洋表面の汚染の広がり

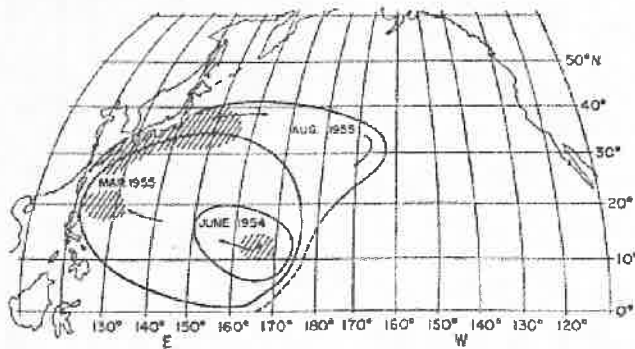
海洋の表面は一連の核実験
が終了したあと、日本政府が、
五四年五月に「俊鶴丸」によ
り調査をおこなって、海水や
海洋生物中の放射能を測定し
ています。

その後アメリカも観測船を
だし、日本、アメリカ、カナ
ダで合同調査もしています。

図1は、三宅泰雄さんたち
が書いた論文から「北太平洋
における放射能汚染の広がり
」についての図を引用して
きました。五四年の五月〜六
月の「俊鶴丸」の調査では実
験海域の西方四五〇kmに放射
能が最大となる海域が見出さ
れ、五五年にアメリカのスク
リップス海洋研究所等が調査

図1 北太平洋における放射能汚染の広がり（ビキニ核実験後の放射能汚染の状況）

（出典：岩波書店、科学、第28号、ページ510-513、三宅および猿橋、「放射化学と海洋」第4図）



をしたときは台湾とフィリピン
の東側の海域で放射能が強
く、ルソン島の沖合いで最大
であった。太平洋全体が汚染
されると太平洋で水産物を採
って、暮らしている国、人は
影響を受けます。五五年の三
カ国合同調査では、海水の放
射能は広く日本の南から東
側、黒潮に乗って北太平洋の
西部一帯に広

がっているこ
とがわかった。
これが海洋表
層をゆっくり
やってきたシ
グナルです。

次に海産物
に濃縮された
シグナルをみ
ます。マグロ
は汚染された
水で育ったプ
ランクトンを
食べ小魚を食
べます。その
マグロを漁船
が獲る。五四
年の実験後の
暮れまでの廃
棄されたマグ
ロは四八五・七

トンという記録があります。
日本政府は米や野菜などの
農産物、魚や海藻などの水産
物など国民の主食となってい
る食品中の放射能もずっと測
っています。結果として五四
年のマグロ廃棄以降、食べ物
を廃棄しなければならぬほ
どの汚染はなかった。これは
裏返せば五四年の実験でおき
た海洋の放射能汚染は相当す
ごかったということです。海
面すれすれで爆発させ、大量
に人工の放射性のものを作り
出してしまった、ということ
だと思えます。

人工放射能の観測網

気象研は五〇年以上、国民
の税金を使って調査している
わけですが、それは基本的に
国の義務だと思えます。つま
り人間の放射線防護のための
基礎データを取るといふこ
と、核実験や原子炉事故があ
ったときにそれはどれくらい
の汚染か、それらを判断する
ための基礎データを集める、
それは日本だけのことではな
く世界的な問題です。

最初は、どれだけ水や大気
から入ってくるかが基本で

す。それをちゃんと観測しよ
うと、五七年頃から世界気象
機関などの国際機関が音頭を
とり、また地球観測年という
こともあり、本来は地球の自
然な状態を知ろうというプロ
ジェクトだったので、人工
放射能汚染は大事な問題な
のでデータを交換し公表しよ
うということでも世界的な観測
網が構築されました。

日本では気象研がその一部
を担っており、地球化学研究
部で長期観測を継続している
のです。ストロンチウム90や
セシウム137などの特定の核種
を測り始めたのは五七年四月
ですが、それ以前にも五四年
の四月から雨の中の放射能の
総量を測定していました。

現在では降ってくる量が最
も多かった時期の一〇万分の
一くらいなので、いろいろな
工夫をしています。たとえば、
いま、雨水を集めるためには、
面積四平方メートルという雨
を受けるところを作っていま
す。日本では平均一六〇〇ミ
リメートルくらい雨が降りま
す。一平方メートルに一ミリ
メートルの雨が降ると一リッ
ク（5めんにつづく）

トル水が溜まります。一年間で約六トンの雨水を処理し、放射能を測るわけです。毎月毎月雨を集めては濃縮して測るという作業を延々と五〇年以上やっています、いまも続けています。

海の方は、昔は測定のためには一〇〇リットル以上の海水が必要で、持ち帰るとすれば一航海で何十トンもの水を持ってこなければなりませんでした。現在では、測定感度を上げて採取量が少なくて済むようにしています。

50年間の長期変動

図2は、五七年四月から〇七年までの一月あたりに降ったストロンチウム90やセシウム137の「月間降水量」を示しています。

六〇年代は大気圏内核実験がたくさん行われました。一月に一平方メートル当たりのセシウム137やストロンチウム90降水量は百から数百ベクレルです。一ベクレルとは一秒間に一個放射線を出す量です。一平方メートル雨を集めて一か月分濃縮をして測ると、そこから一秒間に百から数百個

の放射線をだしていた、という事です。六四年でアメリカとソ連は大気中での核実験はやめたので、降水量は減ってきていて、一年間で半分くらいに減っています。

その後、核保有国が大気圏核実験をやめてほとんど減っていった、もうこれは測れなくなるよと言われているかもしれませんが、八六年四月二十六日チエルノブイリ原発の事故により、六三年と同じレベルに戻ってしま

死の灰の再浮遊

の大半は中国の核実験です。八〇年一〇月二十八日が人類最後の大気圏核実験で、それが成層圏に落ちてきたのは八二年くらいです。

らきているかといいますが、一度地面に落ちて、地面の表層にくっついてるやつが、風で舞い上がって地球を回っている。「再浮遊」といいますが、地表に落ちたものが、舞い上がってきているのです。

「砂漠化」が運ぶ死の灰

一つトピックスをお話します。これを解析してわかったのは、アジア大陸の東側で、かつてたくさん雨が降って人工放射能がたくさん降った領域が、地球温暖化により砂漠化してきて、そこから土が舞い上がるので放射能がやってきている、たまに新聞を賑わす「黄砂とともに放射能がやってきている」という本当の理由は砂漠化にあるのです。

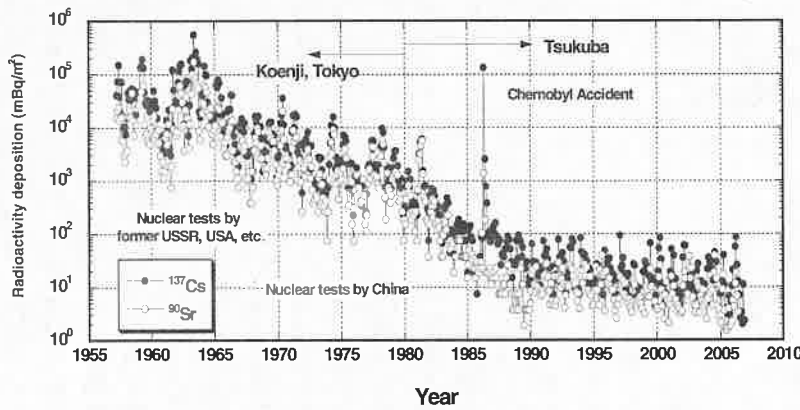
地球上に降った総量を割出す

五七年から測定しているのですが、それ以前のことを何とかして知りたいと思いましたが、その理由のひとつは海に落ちた量を後から計算していくためには、全量、つまり地球上に落ちた総量を知る必要があったので、それを計算しました。

四五年から五七年の四月までについて、一つは北極のすぐそばの水のデータです。氷の上には放射能が落ちる、一年経つとその上に氷の層、つまり年輪が出来る。放射性降下物の年輪ができて、それを解析すると何年にどれくらい降ったかがわかります。それを使って計算をしたのが、この図3です。

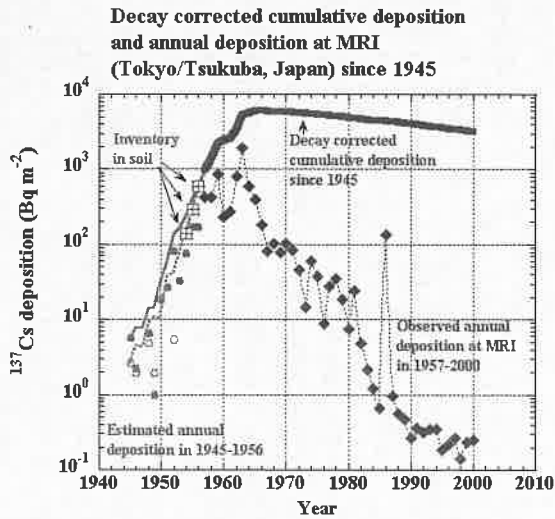
また、昔は公表されていませんでしたが、最近はこの国がどの規模の実験をしたかが

図2 気象研究所がおこなってきた長期観測結果
(出典：環境における人工放射能の研究 2007、気象研究所地球化学研究部 2007年発行)



その後は幸い大気中に大量に人工放射能を放出するような核実験や事故がなかったもので、現在は低いレベルが続いています（が余り下がらない）。これはどこか

図3 1945年から積算したセシウム137の降下量:1970年1月1日現在の値
(出典:青山道夫、大気圏における人工放射性核種の挙動に関する地球化学的研究、1999年)



公表されるようになりまし
たので、そのデータから地球
上に放出された核分裂生成物
を計算します。この二つを見
るとそれなりに合っている。
また地面に入った量は動き
ませんが、土中の総量を測
定するとそのときまでに入
った総量がわかる。これを見
ると、六五年から七〇年くら
いにかけて溜まった総量が最大
となっています。この時代に
は、総量として六〇〇〇ベク

レル/m²のセシウム137があり
ました。人体に影響のあるレ
ベルではありませんが、それ
なりに簡単に測れる位の量で
す。それ以降は中国の核実験
も量的には少なくなり、その
とき降った量は多いですが、
チェルノブイリは総量として
はそれほど大きくはなく〇五
年には二八三〇ベクレルで
す。
これはつくばの値なので、
それを全体に拡張して見積り

をしました。

七〇年の一月一
日時点で地球上に
どれだけ降ったか
という図です(図
4)。つくばで
六〇〇〇ベクレル
/m²、八〇〇〇、
一万ベクレルのと
ころが日本の東北・
北海道沖とアメリ
カの東側の海で世
界的にみても目玉
になっています。
アラビアなど中東
や北極は雨が少な
いので値も低い。
アメリカの砂漠の
方は量が少ない。

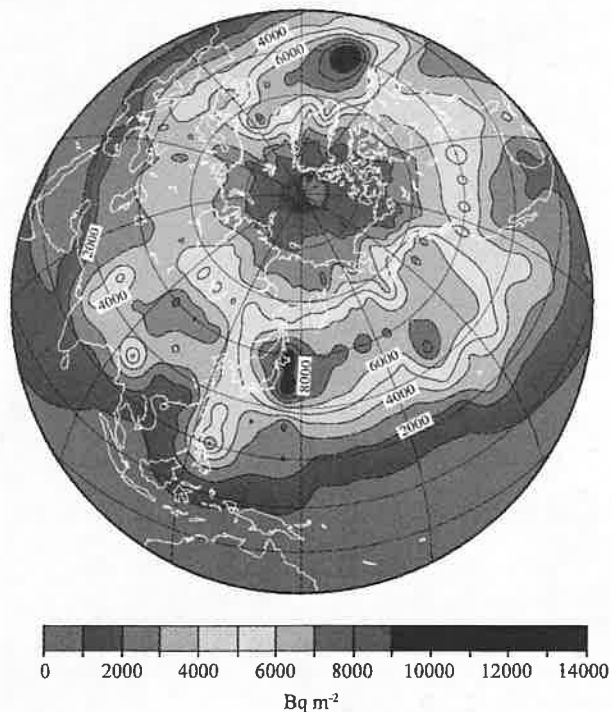
国連の科学委員会がはい
ていた数値の一・五倍くら
い降っていたことが判りまし
た。

なぜそんなに違いがでたか
という海の部分を考慮しな
かったことによります。

全球のデータは、一七九地
点(日本では一地点を気象
研が担っている)で測定した
データを集めました。アメ
リカ、ニュージーランド、オ
ーストラリアなど太平洋の

図4 地球上に降ったセシウム137の分布図

(出典: Michio Aoyama, Katsumi Hirose and Yasuhiro Igarashi, Re-construction and updating our understanding on the global weapons tests 137Cs fallout, *Journal of Environmental Monitoring*, 8, 431-438, 2006.)



島々も測定しています。海
水も採って分析したデータ
ですが、海洋はいつも動いて
るので、大規模核実験直後の
七〇年までのデータを使っ
ています。

地表面に降ったものは動き
ませんので、四九一地点分
データがあつまりました。南極
と北極の氷の分析のデータ、
ロシア領内はどれくらい降っ
たかについて独自にとりま
めたものが単独で作製されて

いたのでそれを使い、集めた
すべてのデータを使用して地
球上に降った総量を再構成し
ました。具体的には一〇〇〇
キロ、一〇〇〇キロくらいの
箱を作つてそこにどのくらい
降ったかを当てはめていった
わけです。

なぜ降下量の高い部分がで
きるかというと、たくさん雨
が降ったところと、それは黒
潮なりアメリカ東海岸沿いの
(7めんにつづく)

ガルフストリームで水と熱を
持つてくるところがあるのと
成層圏に上がったものが日本
に帰ってくるところがある、
その両方が重なるところを
描くところという絵になる。黒
潮とともに水も熱もやってき
ます。海にいまだけだけ人工
放射能があるか、どう分布し
ているかを調べた。さらに、
海洋大循環モデルの研究者と
共同して、それがどうなるう
としているかを予測するところ
までやりました。

海洋中の大移動

私の研究者としての興味は、
「地球上のどこにどれだけ降っ
たか」というこれらのデータ、
つまり負の遺産を上手に使っ
ていくことにあります。

まず海に落ちたものがどう
なるか、簡単にいえば「混じ
りながら移動する」というこ
とです。つまり水にポトツと
インクを落とすと水に混じり
ながら流れに沿って移動しま
す。このように事態は単純で
すが、全球でどうなっているか
を見るのは結構大変です。

太平洋を海の中の流れを考
慮して一一の海域に区分け

し、セシウム137の濃度を見ま
した。

日本の東、日付け変更線ま
での北緯二〇度から四〇度の
領域での表面の水を採取し測
ったデータを集めたところ、
六〇年代に核実験が頻繁にや
られていた時期はセシウム137
の表面水中濃度が高いです。
そのあと、降る量が減ると少
しずつ濃度が下がってきま
す。これは半減期より早い速
度で下がる、これは混じって
移動しているためです。

最近減り方が遅くなって
きている。その理由は、一度
太平洋の表層あるいは内部を
移動して南方の亜表層にいっ
たものが再び帰ってきている
らしい。また、場所によっ
て、たとえば東部北太平洋で
は六〇年代の前半にたくさん
降ったのですが、放射能が高
くなったのは少し遅れて七〇
年代の初めです。これは日本
の東方海域に降ったものが太
平洋を三年から五年かけて横
断したためであろうというこ
とがわかりました。五四年の
調査で夏にビキニ水爆実験海
域の西方四五〇kmにあつたも
のが五五年に日本の近くに來

て、さらに北太平洋に広がっ
ていったという測定と非常に
よく合っていることが判明し
たわけだ。

表面だけではなく、その後
海の内部へどうはいっていか
かも解析してきました。

日本の東方海たくさん降っ
たセシウム137は東へ行き、そ
の後南西方向に向きをかえて
亜表層にはいった。そして現
在では東経一六五度線上では
北緯二〇度の深さ四百メート
ルくらいのところに最大値が
ある。海の中の限定された場
所に分布していることがわか
りました。これはいままでも世
界で誰も知らなかったことで
す。

六〇年代に降ったセシウム
137は、日本の東にたくさん降
った、それがいまは再分布し
ていて、もはや一番早いもの
は大西洋まで行っている、と
いうことが最近の研究成果か
らわかりました。(気象研究
所地球化学部主任研究員)

(本稿は、二〇〇八年二月
二四日に市民講座においてお
こなった講演内容に加筆修正
したものである。)

【参考】日本語解説が「環境

における人工放射能の研究
2007」

[http://www.mri-jma.go.jp/
Dep/ge/2007Artifi_Radio](http://www.mri-jma.go.jp/Dep/ge/2007Artifi_Radio)

つどいへの参加者の感想から

*人間の知恵ではどうすること
もできない問題をかかえたまま

エネルギーが生産され、供給を
受けている、いろいろな状態が
よくわかりました。自然界に一
度放出されてしまえば人智では
どうすることも出来ないものを
作り出し続けることは、人類自
らを滅亡の危機に追い込む姿で
あり、一日も早く別のエネルギ
ーへの転換が望まれます(50代
女性)。

*今後このような講座を開い
て欲しい。研究者の話はとても
大事な内容だと思いました(40
代女性)。

*何も知らずに参加しました
が、知るからVの一步を
進めて生きたいと思う。

*十数年前に放出された放射性
物質が、現在どのような状態に
あるか、ということがわかって
よかった。事件が過去のもので
はない、と言うことが実感をと

report/cover.htmの五章にあ
ります。一九五四―二〇〇七
年の研究論文リストも掲載。

もなつて理解でした。これから
の私たちの生活にどう影響して
くるか、ということも今後勉強
したい(20代女性)。

*青山さんのお話は興味深かつ
たのでまた機会があるとよい
(40代男性)。

*人間の愚かさをあらためて感
じます。最近特に科学の進歩を
伝えるニュースのかけのおそろ
しさをおもいます(70代女性)。

*死の灰のおそろしさは第五福
竜丸展示館の見学で感じたが、
今も日本に降っていることは知
らなかつた。やはり核実験はい
けない。久しぶりに好きな化学
の講座が聴けてよかった(20代
男性)。

*日常生活では考えないけれ
ど、大切な放射能の問題をわか
りやすく伺えて面白かつた(70
代女性)。

*広島出身なので、核の人体へ
の影響、医療面などのことも
取り上げる企画をお願いします
(30代男性)。

協会理事 関口 和さんを偲ぶ

第五福竜丸平和協会会長 川崎昭一郎

関口和（せきぐちかのぶ）さんは1月13日、79歳で亡くなられました。病名は蘇生後脳症による心肺停止です。

1977NGO被爆問題シンポジウムの際、シンポジウム日本準備委員会の事務局代表に加われ、初めて一緒に仕事を致しました。非常に几帳面で、誠実な方だと敬服しておりました。

それから20数年後、縁があって、財団法人第五福竜丸平和協会の役員に迎えることになりました。国鉄労働組合に所属し、長年、原水爆禁止日本国民会議事務局長を務められた平和運動に造詣の深い方に、当協会の役員機構に加わっていただき

(2002年4月より評議員、2003年4月より亡くなられるまで理事)大変心強い思いでした。

第五福竜丸展示館の開館30周年を記念しての座談会(2006年1月)で発言された次の言葉が非常に印象深く残っています。

私は国鉄だったので、よく機関車を全国の公園などに展示します。覆いをしないという条件をつけているのです。実は外に置くというのは非常に維持費がかかるわけですよ。錆びますから塗装をしょっちゅうするとか。しかし機関車ですからよく見えるように外に置いています。第五福竜丸の場合は船ですから屋根をかぶせておくのはや



むを得ないかとも思いますが、建て替えのときはもっと見易くというように運動の面からも今後の保存についてよく検討しておかないといけな

関口さんは砂川基地闘争にも参加され、早くから三多摩地域での草の根平和活動を支え指導され、多くの地元の人々の信頼を得ておりました。

関口さん、どうか安らかにお眠り下さい。

3・1ビキニデー関連の行事より

東京宗平協が3・1映画の夕べ2月4日、3・1ビキニデーの取り組みとして、東京宗教者平和協議会が映画「第五福竜丸」(新藤兼人監督)を鑑賞する会を開き30名が参加しました。会では、安田和也協会事務局長が講演し、第五福竜丸事件の意味、市民による保存のとらえ、映画についての解説をおこないました。

*

日本山妙法寺の平和行脚スタート
3・1ビキニデーに向けて、久保山愛吉さんのお墓のある焼津・弘徳院まで平和行脚を繰り広げる日本山妙法寺の僧侶ら30名が、2月13日、第五福竜丸展示館前を出発しました。一行は第五福竜丸を見学のあと出発式を行い、通し行進者の紹介や激励の挨拶などをおこないました。協会からの激励メッセージが紹介されました。

核兵器廃絶を願う美術家の会(静岡)、作品展でベン・シャーン展示2月27日～3月2日、静岡の美術家の会が反核平和を願い美術展を開きました(静岡市民ギャラリー)。

会員が平和を願って描いた作品とベン・シャーンの『ここが家だ』絵本の額装作品27点、協会所蔵の原画7点も展示され多くの来場者がありました。最終日の2日には、安田協会事務局長がベン・シャーンと第五福竜丸事件と題して講演しました。

協会理事・監事・評議員 懇談会

第五福竜丸平和協会は、2月24日午前11時より13時まで、役員懇談会を開催しました。当日は、川崎会長から公益法人制度改革についての経過・内容と協会の対応についての報告があり、質疑討論がおこなわれました。

新たな法律は本年12月1日に施行されますが、協会として公益財団法人

の認定を受ける準備作業をすすめ、今後の理事会・評議員会などで討議を重ねることを確認しました。

また船体保存、エンジンなどへの対応のための専門家からなる「第五福竜丸船体等保存委員会」の発足について報告されました。

近藤友一郎さん逝去

焼津の船大工の棟梁で近藤和船研究所を主宰する近藤友一郎さんが2月4日逝去されました。享年79歳。

近藤さんは、昨年4月から9月まで第五福竜丸展示館で開催された「船大工の技と仕事」展にあたり展示資料(船体模型、蒸し曲げ器模型、大工道具など)を貸出され、木造船建造についての記念トークをおこないました。